

# 華西辺疆研究の歴史と課題

編集部

中国人類学における「華西」とは、中国の西部という地理上の言葉ではない。歴史上の「西南地区」、すなわち四川、貴州、雲南、広西、チベット、甘肅など辺疆の民族地区を含む広範な地域を指す。これは、民国期に、成都の「華西協合大学」を中心に行われた人類学研究が対象とした地域でもある。

「華西協合大学」（略称、華西大学）は、一九二二年、四川省成都市華西区（現在の四川大学華西校区、華西壩ともいう）に創立されたミッション系大学である。教会では、布教のために各地の情報が必要とした。そこで、華西大学は人類学や社会学を重視し、西欧人類学の理論や方法を導入してフィールドワークを行い、情報収集とともに研究を進めた。また、一九二二年には華西大学内に外国籍研究者が「華西辺疆研究学会」を設け、英文学会誌『華西辺疆研究学会雑誌』（一六卷二〇冊、論文三〇〇余篇）を刊行し、その研究成果を世界に向けて発信した。これは中国人類学における系統的な少数民族研究の始まりといえる。

さらに、一九三〇年代の対日抗戦期には、金陵、齊魯、燕京など六つの大学が成都に避難してきて、多くの国内の著名な人類学、社会学、歴史学、考古学などの研究者が華西壩に集結した。彼らは、地元の華西大学や四川大学などの研究者とともに人類学や社会学等を教えて人材を育成し、同時に、華西辺疆研究学会に参加して民族地区でフィールドワークを実施し、大きな成果をあげた。人類学や社会学の「中国化」が進んだ時期といわれる。これらの研究者集団は「華西」の名でよばれ、所謂「華西学派」が形成された。

「華西学派」とは、二〇〇七年に四川省民族研究所の李紹明（一九三三―二〇〇九）が論文「略論中国人類学的華西学派」（『広西民族研究』二〇〇七年第三期）で初めて提唱した、中国人類学史の新たな一派である。華西大学に集結した人類学者等から構成され、西南民族研究、特に、康蔵地区（現在の四川省甘孜蔵族自治州、阿壩蔵族羌族自治州、涼山彝族自治州）のチベット族やチャン族、彝族な

どの民族研究に優れた成果をあげ、大学創立時から一九五二年に院系調整で活動が停止されるまでの約四〇年間存続した。

しかし、「華西学派」およびその研究成果は、中国の人類学史においてはほとんど取りあげられることがなく、知られることがないまま、その成果も忘れられようとしている。実は、院系調整で華西大学を吸収合併した四川大学の関係者ですら、現在、華西大学や華西学派のことを詳しく知る者は多くない。李紹明は、華西学派を提唱する理由を次のようにのべている。四川大学歴史系（学部）出身で四川近代史専攻のある若手研究者が自著の序文「デイビット・グラハムを探して」に、アメリカで博士論文を執筆した時に、グラハムの論文を必死に探したら、実は彼は華西大学の教員で非凡な研究者であり、それを全く知らなかったことは遺憾であると書いていた。李紹明はこれをみてとても驚き、先人として語ってこなかったことに強い自責の念を覚えるとともに、今後の西南民族研究発展のために華西学派の実態を明らかにし、その意義を問わねばならないと決心したと語る。

李紹明は、「華西大学の最後の学生で、かつ新中国が養成した第一世代の学者でもあり、民族学と歴史学、西洋の理念と中国の伝統的道德観念を学んだ学者」といわれ、欧米の民族学とマルクス主義民族学の両方を学んだ西南中国

民族学を代表する、華西学派を語るのに最もふさわしい学者である。

日本においても、民国期の華西における民族研究についてはほとんど知られていない。筆者もチャン族や四川チベット族の研究において民国期の先行研究をよく引用するが、それらを華西学派として意識したことはなかった。また、一九八〇年代末に四川大学に留学中、歴史系資料室に民国期の英文論文や边疆服務等の資料が雑然と積まれているのを発見して、その資料の重要性に驚喜した記憶がある。しかし、それらが華西学派の遺産であることに気づいたのは、李紹明論文を読んだ後であり、二〇一四年に復刻出版された『華西边疆研究学会雑誌（整理影印全本）』（全一〇巻、四川大学博物館整理、中華書局）を手にした時だった。

結局、華西学派に関する討論は、李紹明が二〇〇九年に逝去したために一旦中断された。しかし、弟子の李錦（四川大学）が「一九二〇～四〇年代の人類学華西学派の學術体系研究」（二〇一七年度国家社会科学基金重大招標項目）を提起して、ようやく再開された。本号で紹介するシンポジウムは、まさに華西学派と華西边疆に関する研究の第一歩であるといえる。

特集「華西边疆研究」では、これまであまり知られることがなかった民国期の華西边疆研究について歴史的背景や

華西学派等の視点からその実態を明らかにするとともに、現在の西南民族研究にそれらがどのように繼承され、今後、どのような発展の可能性があるのか考察する。構成はシンポジウムと論説からなる。まず、シンポジウムでは民国期の華西研究の実態をさまざまな視点からの報告によって明らかにし、次に、論説では、九篇の論考によって現在の西南民族研究の水準と特徴を示し、両者の関連性と繼承性、今後の研究の方向について考える。

シンポジウム「二〇世紀前半の華西边疆研究と華西学派」は、二〇一八年四月二三日に四川大学で開催された。まず、華西学派について「一九二〇～四〇年代の人類学華西学派の学術体系研究」に関する問題提起とそれに対する提言がなされ、次に、華西边疆研究の実態と今日的意義について、多様な視点が報告された。報告は五つの内容に分かれる。第一は李紹明の基調論説、第二はシンポジウムの目的、第三は華西边疆研究と華西学派研究の意義、第四は華西学派研究の諸テーマ、第五は華西学派の学術体系である。

論説は、すべて長期にわたるフィールドワークを基にした民族研究である。対象とした民族は、四川チベット族、チャン族、ヤオ族、漢族および歴史上の「西南民族」である。このうち四川チベット族を対象としたものは四篇あり、アムド、カム、ギャロン、タシユという下位グループ（族

群）を取りあげる。四川チベット族は、総人口一四九万六五二四人（二〇一〇年）で、アムド、カム、ギャロン、白馬、グイチョン、アルス、ダウ、ジャバ、ムニヤ、ナムイ、シヒン、チョユなどの下位グループからなるが、アムドやカム、ギャロン以外は人口も少なく、母語消滅の危機に直面している。

まず、李錦「家屋の意義」は、四川省雅安市の曉磧ギャロン・チベット族を事例として、「房名」（家屋の名称）繼承の過程における婚姻と居住に関する原則の具体的な機能と親族関係を論じ、家屋の意義について考察する。曉磧は交通不便な山間に位置し、旧来の生活習慣を最もよく残す地域の一つである。袁曉文「タシユ・チベット族の歴史の記憶と族群の認識」は、歴史資料とフィールドワークの結果を用いた「史誌結合」の典型的な論説で、タシユの形成に関わる歴史的な複雑性を彼らの伝説や習慣、民族間関係などから明らかにする。袁自身がタシユであり、自民族研究の成果といえる。

川田進と小西賢吾は、四川チベット族の大多数を占めるカム、アムドにおける宗教と政治との関係、すなわちチベット仏教の寺院および教徒と中国共産党政治との関係について分析する。このうち川田論説は、阿壩州阿壩県の大僧院キルティ寺院と甘孜州色達県のラルン五明仏学院という二つの宗教拠点を舞台にした中国共産党の統一戦線活動

に焦点をあて、抗議の焼身自殺などによって共產党に批判的に対応する前者と柔軟な道を探る後者を比較して、東チベットにおける政教関係の特質を浮き彫りにする。小西論説は、チベット族と漢族の境界に位置する阿壩州松潘県において、ボン教のS僧院の落慶法要とS村のボン教徒を事例として、「本土宗教」としてのボン教の地域を越えた宗教ネットワークの「更新」という動態について分析する。

ともに、チベット研究の核心部分であるが、現在の政治体制下では中国人研究者が取りあげにくいテーマである。

チャン族を対象とした耿静「岷江上流のチャン族と漢族の歴史的関係」は、汶川県雁門郷蘿蔔寨村を事例とする。

同村は、現在も日常語としてチャン語を用い、伝統文化をよく残すとされるが、同時にその言語や風俗習慣、民間宗教には、所謂漢文化の要素も多く含まれている。外来文化の受容に表れた漢族との歴史的関係について明らかにする。

ヤオ族を対象とした張琪「土地への依存と来世現世間の秩序」では、これまであまり研究が進められていない広西チワン族自治区の里湖瑶族郷や八圩瑶族郷、貴州省の瑶山瑶族郷に分布する、人口四万人余りの白褲ヤオの「牛祭」を取りあげ、先行の説の問題点を明らかにしたうえで牛祭及びその後の儀式における象徴の使用について分析し、牛祭の真の目的と白褲ヤオ文化における意味について考察す

る。理論とフィールドワークを着実にふまえた若手の儀礼研究である。

歴史上の「西南民族」を対象とした李沛容「古史伝説における漢「苗」関係と近代中国における国族構築のプロセス」は、多民族国家中国において現在も大きな課題である「中華民族化」（国族化）による国民国家建設をテーマとする。近代中国における国族構築では、「泛苗化」された西南民族をどのように国族化するかが課題の一つであった。李論説は、古史伝説における漢苗関係の解釈がさまざまな政治勢力にどのように利用されたか分析する。中国伝統の歴史学的手法とフィールドワークに基づいて華西の「西南民族」に関わるテーマに取りくんだ労作である。

王田「民国期の四川西北地区におけるアヘンの栽培売買と族群政治」は、アヘンの大生産地をひかえた四川省阿壩州理県の雜谷腦河流域（岷江系）において、軍閥や袍哥、煙幫、チベット族やチャン族、およびチベット族と密接に繋がった甘肅省洮州の回族商人などによって形成された「趕煙会」のアヘン市場ネットワークについて、「族群政治」の視点から分析したものである。重要なテーマであり、百年余りを経てようやく実態が明らかにされようとしている。

最後の河合洋尚「四川省における〈客家空間〉の生成」は、成都市東山地区の「広東人」が客家人として再解釈さ

れ、「観光化」によって新たな「客家空間」が生成されていくプロセスがあざやかに論じられている。「空間化」という切り口が、近年、全国でみられる民族文化の遺産化や画一化を考える上で有用であることが示されている。

以上から、近年の華西研究について次のような特徴があげられる。

第一に、研究対象の範囲は、民国期の「華西」、すなわち歴史上の西南民族地区をほぼ踏襲しており、民国期の華西边疆研究は、一九八〇年代に成立した西南民族学会の西南民族研究にそのまま継承されていること。また、当時の研究の中心であった康藏研究は、一九八〇年代に費孝通によって提唱された藏彝走廊研究の地域や対象とほぼ一致し、やはり現在の西南民族研究の中心である。

第二に、研究方法は、従来のフィールドワークの重視と歴史資料の活用に加えて、欧米の理論による分析がなされていること。また、研究テーマは、現在の政治体制下で中国側と日本側がそれぞれの制約を受けながらも、双方の立場を生かしたタイムリーなものが選択されている。

第三は、民国期の「遺産」が十分に活用されていないこと。特に、復刻された『華西边疆研究学会雑誌』の具体的な内容や海外への影響等については研究が俟たれる。

本特集は、華西边疆研究および華西学派に関する討論再開の第一歩である。二〇世紀前半の華西研究をふりかえる

ことで、さらに、別の未知なる遺産の発見に繋がれば幸いである。

## 注

〈1〉 院系調整とはソ連モデルにならって全国規模で実施された高等教育機関の改造と調整のこと。教会学校や私立学校が公立とされ、学部学科の統合改編で人文系の政治学や社会学などが停止された。

〈2〉 李紹明口述、伍婷婷記録整理『変革社会中的の人生與學術』世界図書出版公司、二〇〇九年、整理説明一頁。

(松岡正子)